教員養成課程カリキュラムに取り入れた音楽アウトリーチ活動 †

―宇都宮大学教育学部音楽教育専攻の実践例―

新井　恵美*・木下　大輔*
宇都宮大学教育学部*

地域貢献は，いまやどの大学にとっても必須の課題になっている。また，音楽家や音楽教育家が，地域の学校や施設などに出向いてコンサートやワークショップなどを行うのは珍しくなく，そうした活動が近時とみに重要視されていることは，言うまでもない。こうした「音楽によるアウトリーチ活動」を，宇都宮大学教育学部学校教育教員養成課程音楽教育専攻では，2007年度より正規の授業内容に取り入れている。本稿では，この宇都宮大学での実践を，教員養成教育における地域貢献の恒常的活動の一例として紹介する。

キーワード:　音楽によるアウトリーチ、地域貢献

１．「音楽アウトリーチ研究」授業の位置づけ

国立大学法人宇都宮大学の教育学部は，現在１学年学生定員210名の比較的小規模な学部である。そのうち，教員免許取得を卒業要件とする学校教育教員養成課程は学年定員150名，その中の音楽教育専攻は学年定員８名（2009年度入学生までは10名）の小さな所帯である。同専攻は，小学校１種免許と中学校１種「音楽」免許の取得を必修とするコースである。

学校教育教員養成課程の卒業要件は125単位。そのうち，音楽教育専攻の学生が履修しなければならない音楽関係の専門科目は，計43単位である（内訳：小学校教科専門科目（音楽）１単位，小学校教科教育法（音楽）２単位，中学校教科専門科目20単位，中学校教科教育法８単位，専攻専門科目12単位。下線の科目については，図１参照）。

アウトリーチの授業は，専攻専門科目（選択科目）に位置づけられている。開講形態は通年不定時の演習で，内容差別化のない「音楽アウトリーチ研究A」，「音楽アウトリーチ研究 B」の２科目（各２単位，担当教員：新井恵美，木下大輔）を隔年で開講することにより，学生は２年間連続で履修し（２～３年次），単位を積算することができるようにしてある。

† Emi ARAI* and Daisuke KINOSHITA* : Music Educational Outreach on the School Teacher Training Course.
* Faculty of Education, Utsunomiya University

宇都宮大学ウェブ・シラバスには，この授業の「内容」として，社会への音楽普及プロジェクト（音楽によるアウトリーチ）の企画と実施を行うこと，また「授業の到達目標」として，それらの活動を行うことにより，音楽と教育による地域貢献を図ることが，明示されている。学生には，授業における各人の活動状況報告という形で，年に２回のレポートが課される。

学生は，作曲，声楽，器楽などの専門科目や教職科目，教育実習などの段階的履修と並行してアウトリーチ活動を体験することになり，修学上の相乗効果をあげている。

2007年度の授業開始にあたって，スズキ・トーンチャイム（全音域）一式を配備した。それ以降，本授業の実施に関わる支出（楽器・備品・消耗品・図書・楽譜等の購入，修理・修繕，広報，調律等の役務など）のために，初年度より毎年，学内の「教育改革・改善支援経費」の配分（各年度30～50万円程度）を受けている。

２．活動内容

2.1.　交流授業

活動内容の一つとして，学校との交流授業がある。これは継続的な授業の補助ではなく，ある題材の中

【図１】宇都宮大学教育学部 学校教育教員養成課程 音楽教育専攻　中学校「音楽」に関わる科目／専攻専門科目　履修見取り図　　2012年度入学生の場合

領域・区分	1年		2年		3年			4年	
	前期	後期	前期	後期	前期		後期	前期	後期
基盤教育（教養）		音楽通論							
教科教育			☆中等音楽科教育法Ⅰ	☆中等音楽科教育法Ⅱ	☆中等音楽科教育法Ⅲ ☆中等音楽科教育法Ⅳ 音楽研究セミナーＡⅠ		音楽研究セミナーＡⅡ	卒業研究（論文）	
			音楽アウトリーチ研究Ａ		音楽アウトリ		ーチ研究Ｂ		
音楽理論	☆和声Ⅰ	☆和声Ⅱ	☆和声Ⅲ	和声Ⅳ					
作曲法				☆作曲Ⅰ	☆作曲Ⅱ 音楽研究セミナーＢⅠ		音楽研究セミナーＢⅡ	卒業研究（作品）	
編曲法									
音楽史				☆音楽史Ａ	☆音楽分析				
日本の伝統音楽			☆音楽史Ｂ					卒業研究（論文）	
諸民族の音楽									
ソルフェージュ		☆ソルフェージュ							
声楽	☆声楽Ⅰ	☆声楽Ⅱ	☆声楽Ⅲ	☆声楽Ⅳ	音楽研究セミナーＣⅠ		音楽研究セミナーＣⅡ	卒業研究（演奏）	
日本の伝統的な歌唱									
合唱				☆合唱					
器楽		☆器楽	ヴァイオリン						
			金管楽器		打楽器			木管楽器	
合奏			☆合奏Ⅰ		☆合奏Ⅱ				
伴奏				☆伴奏法					
和楽器		☆和楽器							
指揮法					☆指揮法				

教育実習（本実習）

教職実践演習

☆＝中学校教科専門科目および教科教育法（１種免許要件・必修科目）　その他＝専攻専門科目（選択科目）

で，訪問先の要望を聞きながら，受講生が１～２時間分の授業をさせていただきながら児童・生徒と交流するという形で行っている。

訪問先は，当初は大学教員や学生の持つ公私の人間関係によって見つけていたが，近年では本学の音楽アウトリーチ活動が近隣に知れ渡ってきたこともあり，学校から直接オファーをもらうことも少なくない。

訪問の頻度は，各年度３～４回程度である。

小学校第５学年対象の「ショパンってどんな人？」という題材では，ショパンの生涯を，生演奏を交えた音楽劇に構成して演じた。ショパンが 11 歳の時に作曲したポロネーズを演奏したり，《子犬のワルツ》が作曲されたエピソードを盛り込んで演奏したり，途中にスライドやクイズを挿入するなど，児童に分かりやすく，興味を持ってもらえるような構成を工夫した。（図２）

小学校第５学年対象の「不思議な音楽を作ろう」という題材では，２時間訪問させていただいた。訪問先の小学校から，１時間目に不思議な音楽の鑑賞を児童にさせて欲しいと要望があり，受講生がリゲティ《ムジカ・リチェルカータ》第１曲や，円周率の音楽（数値を音名に置き換えたもの），口琴の演奏，シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》などを選び鑑賞させた。その後，２時間目では音楽づくりの支援を行った。

小学校第６学年対象の「ジャズって何じゃろ？」という題材では，コール・アンド・レスポンスのお手伝いをさせていただくなどの活動を行った。ジャズに触れたことのない受講生も多く，ジャズのサークルに所属している受講生から教えてもらいながら，入念に事前準備をしていた。

小学校第１学年対象の「おどれ！ルンバ」という題材では，《かえるのルンバ》の鑑賞の中で，楽器当てクイズや身体表現などを行っている。

他にも事例はあるが，どの交流授業でも受講生が作成した学習指導案を授業担当者（大学教員）がチェックし，訪問先の教員に見てもらってから授業を行っている。

また，学校からは教材の合唱や合奏の範唱・範奏をして欲しいという要望がかなり多い。子どもたちに教材曲を生で聴かせたいという気持ちが，学校現場には強いのかも知れない。

【図２】音楽劇「愛と音楽のショパン劇場」台本(抜粋)

	（前略）
ナレーター	ショパンは，音楽学校でたくさん勉強しました。1830 年，20 歳の時，オーストリアのウィーンで音楽の勉強をするようになりました。 そのときです。ショパンのふるさとのポーランドは，ロシア帝国に支配されていましたが，国をあげての戦いを始めたのです。ショパンはポーランドへ帰ることができなくなってしまいました。ショパンは，この後，死ぬまでふるさとのポーランドに帰れなかったのです。
ショパン	なんてことだ！僕のふるさと…。家族や友達を残して僕は何をやっているのだ。僕は，僕は，うわー！！
ナレーター	ショパンはポーランドへ帰れなくなってしまった悲しさや孤独感を《革命》の作曲にぶつけました。
♪演奏	《革命のエチュード》
	（中略）
ナレーター	ここで，ひとつ作曲のお話を紹介します。二人は子犬を飼いました。
子犬	ワンワン！！
ショパン	かわいいね。
ジョルジュ・サンド	ほら，わんこ，よしよし。
子犬	ワンワン！！ （尻尾を追いかけて回る）
ショパン	よしよし，君の曲ができたよ。
♪演奏	《子犬のワルツ》（冒頭部分のみ）
ジョルジュ・サンド	とっても素敵だわ。
子犬	ワーン！
ナレーター	子犬の尻尾を追いかける様子を見てこの曲ができたそうです。《子犬のワルツ》を聴いてみましょう。
♪演奏	《子犬のワルツ》
ナレーター	では，ちょっと感想を聞いてみます。
	（後略）

2.2.　ワークショップ

受講生主催のワークショップも活動内容として挙げてはいるが，実際の活動はあまり多くない。年に１～２回程度である。
過去には，栃木県教育総合センター主催の行事で，小学生向けトーンチャイムのワークショップを行ったことがある。集まった子どもたちにその場でチャイムを割り振り，演奏させるというのはなかなか難しかったようで，学生も勉強になったようであった。

前述の通りワークショップは活動が少ないため，今後どのような形にしていくか，改善の余地があろう。

2.3.　演奏会

学校や施設等での演奏。この活動が本授業の中で最も多く要請があり，これまでに学校，幼稚園，保育所，学童保育，病院，博物館などで，年に５～15回程度演奏してきた。聴衆が十数人程度の室内で演奏することもあれば，広いロビーなどで100人近くに聴いていただくこともある。

先方と綿密な打ち合わせを行いながらプログラムを構築したり，音楽劇を台本から作成して演じたり，演奏の合間に楽器紹介を挟んだりしている。特に，幼稚園や保育所では珍しい楽器の紹介をして欲しいという要望が多く，受講生も様々な工夫を凝らして紹介している。

プログラムも対象（鑑賞者）によって多種多様である。ある保育所で「アニメソングは禁止しているのでクラシックでお願いしたい」と要望があった時には，どうしたら飽きずに聴いてくれるか，受講生が何度も話し合いの機会を設けてプログラミングしていた。また，幼稚園や保育所では30分程度のコンサートをお願いされることが多い。幼児が落ち着いて聴いていられる時間はその程度とのことで，どんな曲をどんな編成で，どんな順序で聴かせるかを考えたり，子どもたちと一緒に歌う曲をプログラムの最後に入れたりするなど，毎回工夫を凝らしている。

ある病院のコンサートでは，先方の病院はもちろん，新聞社，地元FM局，県内企業など様々な組織が関わっており，受講生はそれぞれの人々と打ち合わせを重ねた。新聞記者から取材を受けたり，地元FM局のアナウンサーからインタビューを受けたりするなど，普段の学生生活ではできない経験をさせていただき，社会性も身に付いたと思われる。また，このコンサートがきっかけとなり，音楽教育専攻の学生が地元民放 FM 局の番組を持たせてもらうことになった。

県立博物館の企画「キョウリュウナイト」の中で，博物館のエントランスで演奏をさせていただく機会があった。これまで経験してきたコンサートと違うのは，来場者は音楽を聴くのが目的ではないということである。もちろん受講生は音楽を聴いて欲しいという気持ちが強い。そのため，自分たちの演奏を，足を止めて聴いてもらうにはどうしたら良いかということを夜遅くまで話し合った。結果，エントランスに用意された椅子はほぼ全て埋まり，大成功を収めることができた。

2.4.　学内「午後のコンサート」

学内で行われる演奏会であり，正確にはアウトリーチ（=外へ手を伸ばす）の範疇には入らないであろう。しかしながら，学内施設（多目的ホール，合奏室など）を会場とするこの「午後のコンサート」は，学外者，地域の方々へも広報・公開しており，学生たちの活動も，学外へのアウトリーチと内容的に密接に関連しているので，本授業の中に位置づけている。

「午後のコンサート」は，１年度に２～３回程度実施される。その機会は，大学オープンキャンパス，ホームカミングデー（ともに休日昼過ぎに開演），クリスマス，新年の時期（授業の少ない平日の夕方）などである（図３）。

演奏会の企画，プログラム構築，合同練習，ポスター等のデザイン，広報活動などを，全受講生が分担して行うとともに，受講生自身が出演する。

演奏会本番においては，日頃，声楽，器楽などの授業で研鑽を積んでいる成果を，独唱・独奏のステージで披露したり，作曲作品を発表したりする。また，合唱，室内楽，リコーダー合奏，トーンチャイム合奏，など，集団で作り上げる音楽の妙を表現するとともに，受講生自身がその喜びと意義を存分に味わうことができる（図４）。

【図３】午後のコンサート開催履歴

回数	日付	開演時刻	会場	テーマ・名目等
1	2007. 6. 6（水）	13:00	大学会館多目的ホール	
2	2007. 7.21（土）	13:30	教育学部 2103 教室（大講義室）	オープン・キャンパス
3	2007.12.19（水）	16:10	大学会館多目的ホール	クリスマス・コンサート
4	2008. 8. 3（日）	13:30	教育学部 2103 教室（大講義室）	オープン・キャンパス
5	2008.12.17（水）	16:10	大学会館多目的ホール	クリスマス・コンサート
6	2009. 8. 2（日）	13:30	音楽棟合奏室	オープン・キャンパス
7	2009.11.22（日）	13:30	音楽棟合奏室	学園祭
8	2010. 1.20（水）	16:10	大学会館多目的ホール	新春コンサート
9	2010. 4.29（祝）	14:00	音楽棟合奏室	ホーム・カミング・デー
10	2010. 8. 1（日）	13:30	音楽棟合奏室	オープン・キャンパス
11	2010.12.22（水）	16:10	大学会館多目的ホール	クリスマス・コンサート
12	2011. 7.24（日）	13:30	音楽棟合奏室	オープン・キャンパス
13	2012. 7.15（日）	13:30	音楽棟合奏室	オープン・キャンパス
14	2012.10.27（土）	13:30	音楽棟合奏室	ホーム・カミング・デー

【図４】「第 13 回 午後のコンサート」プログラム

栗原正己 ： 「ピタゴラスイッチ」オープニング・テーマ（リコーダー４重奏）
A.スカルラッティ ： すみれ（ソプラノ/チェンバロ）
岩崎 尋(＊) ： Ginkgo biloba（トロンボーン/ピアノ）
クンマー ： 「庭の千草」変奏曲（フルート/ピアノ）
J.シュトラウス１世 ： ラデツキー行進曲（ピアノ８手連弾）
木下大輔 ： 子守唄 ～RADIO BERRY「ベリークラシック」テーマ音楽（トーンチャイム合奏）
木村 弓 ： いつも何度でも（トーンチャイム合奏）
宮川 泰 ： 宇宙戦艦ヤマト（リコーダー5 重奏）
ラヴェル ： 亡き王女のためのパヴァーヌ（リコーダー５重奏）
リスト ： 巡礼の年第３年 より エステ荘の噴水（ピアノ）
ラヴランド ： ユー・レイズ・ミー・アップ（４重唱/フルート/ピアノ/マリンバ）
久保田早紀（木下大輔編曲）： アルファマの娘/トマト売りの歌（ソプラノ/ピアノ）
プッチーニ ： 歌劇「ジャンニ・スキッキ」より 私のいとしいお父様（ソプラノ/ピアノ）
チルコット ： 小さなジャズ・ミサ より グロリア（女声合唱/ピアノ）
河井智恵海(＊) ： 歌いたい人、この指止まれ！（混声合唱/ピアノ）

(＊)＝宇都宮大学教育学部音楽教育専攻の学生

3．受講生の声

受講者に提出させた学期末レポートの記述から，この授業の成果・課題として抽出できるものを，以下の①～⑤に分類して列挙する。

① 受け手・聴衆の方々へもたらすことができたもの

・学校や施設などで，普段あまり演奏会などに出かける機会のない人たちに，生演奏を提供することで，音楽の魅力を伝えることができた。
・音楽アウトリーチとは，音楽をより身近に感じたり，楽しんだりできるようにするためのサポートではないかと思った。
・我々の活動は，ただ演奏するだけではなく，受け手の人々にとって遠い存在であったかもしれない音楽を身近なものにする，という意味も持っている。
・小学校での交流授業での児童からの反応に，授業中に行った教材の生演奏が「すごかった」という感想，児童自身の音楽への興味が深まったことがわかる感想があった。何らかの形で音楽のよさや楽しさを伝えることができたと思えた。児童たちのこれからにつながるような活動になったのではないか。

② 双方向の学び

・演奏者と聴き手の双方向の学びが生じると感じた。
・企画の実施には苦難を伴うが，笑顔・拍手などにより音楽する喜びをいつもいただいている。この活動は一方的なものではなく，お互いが笑顔になれるものである。
・この授業を受講したのは，自分が人前で演奏することに慣れたいから，という動機からであった。しかし，活動をしてみて別のやりがいを見出した。病院で演奏をした時，演奏会に行きたくても行くことができない長期入院患者の方々のことを知った。その人たちのために頑張るという思いがあれば，相手に伝わり，結果として良いものを成せるということを学んだ。
・受講生どうしで，さまざまな音楽的価値観に触れることができた。他の学生が音楽と真剣に向き合う姿に接することができ，自分自身も勉強になった。
・音楽アウトリーチは，活動の担い手と受け手の双方に対等の学びをもたらし，その過程を経て，音楽を社会に浸透させようとする活動だと考える。
・ただ演奏の技量を見せるだけではなく，いかに聴衆を楽しませるかを考えることが必要だと感じた。

③ 企画・立案・マネジメントについて

・音楽教育専攻の学生としては，演奏家の立場と教育現場の両方の事情を踏まえながら，活動を計画することが可能であり，コーディネーター的な役割も担えると考えられる。
・活動の場を提供してくださる側と，受講生側が，蜜に連絡を取り合い，話し合い，意思をすり合わせて，一つのプランを作り上げていく重要性を学んだ。
・計画性を学んだ。発案～企画～練習～本番。
・全体をまとめることの難しさ。関係者それぞれの要望をまとめることの難しさ。

④ 活動の量と質の問題

・自分自身の演奏の質が十分でなかった。企画・運営業務が忙しすぎたため，これからはバランスを考えるべきであろう。
・依頼を受ける数（量）が多くなり，一つ一つの中身（質）が薄くなってしまった。
・依頼数と受講者数のバランスの問題。年々依頼数が増えているため。お断りしなければならないものもあった。
・自分たちのキャパシティを考えるべきであった。依頼を何でも受けるのではなく，他の授業等の学業と両立できる範囲であるか，準備期間が十分にあるか，よい演奏をするためにも余裕を考えるべきであった。
・人前で演奏するということは，場所が誰もいないロビーであれ，騒がしいレストランであれ，最高の演奏をしなければならないが，演奏会の数が多くやる気が殺がれてしまったこともあった。すべての演奏会で本気が出せるようなスケジュールの調整が必要だと思った。
・音楽アウトリーチは，それを供する側と求める側が互いを必要とした時に行われるべきものである。

⑤ 活動の拡がり

・小学校でのアウトリーチ活動をきっかけに，これとは別の学童保育でボランティア活動をさせてい

ただくという縁ができた。アウトリーチ活動をきっかけに，関わる人々に新しい風を吹き込むことを期待できるのではないか。

4．成果と課題

この項では，授業担当者の観点から見た成果と今後に向けた課題について述べたい。

交流授業の成果としては，教育実習と異なり，現場の教員と対等な関係での授業作りを体験できることが大きい。さらに，教材等を自ら開拓する力がつき，児童・生徒とのアンサンブルを通して，コミュニケーション力も高まった。

学内「午後のコンサート」においては，受講生に「人に聴かせる演奏」への気づき・意識化が見られ，演奏会のマネジメントの意義を学ぶだけでなく，社会的なスキルも高められた。

受講生の感想からも，自発的・能動的な体験ができたこと，コミュニケーション力のアップ，異なる学年の協働体験等が挙げられ，究極的にいえば「人と音楽とのつながり」の学びが見られたといえる。今後の課題としては，以下のことが挙げられるだろう。

4.1. 成績評価の問題

前述のように，本授業は，不定時で行われている。他の定時授業等との兼ね合いもあり，基本的に出席を取っていない。学期末の最終レポートで受講者一人ひとりの活動を自己申告させるとともに，授業担当者が活動を観察することにより，評価をしている。

しかし，受講生に主体的に活動させるという目的から，我々はすべての作業に立ち会っておらず，その部分においては受講生を信頼するより他にはない。そのため，他の授業科目のような厳密な点数化は困難である。宇都宮大学ではGPT・GPA制度を近年採用しており，本授業の評価のあり方については，今後の課題といえよう。

4.2. 活動の交通費等の問題

本授業のために，学内の「教育改革・改善支援経費」の配分を受けていることを前述したが，活動に関わる受講生自身の交通費については，受益者負担の原則から，大学公費の支出対象にならない。いわば，活動を正課の授業として行っているがゆえに，自己負担となる。そのため，遠隔地への訪問を数重ねるのは難しい。

4.3. 他の定時授業等との兼ね合い

特に学校や幼稚園，保育所の訪問は，平日であることがほとんどである。そのため，受講生は他の定時授業を欠席して活動に参加することになる。宇都宮大学では欠席に関する取り扱い要領が厳格に定められており，アウトリーチ活動による授業欠席は公欠扱いにはならない。我々から当該定時授業の担当教員へ欠席届を提出し，考慮をお願いしているが，その取り扱いは当該定時授業の先生の裁量にゆだねられている。となると，定時授業の受験資格との関係もあり，活動を増やすことは容易ではない。

5．結語

授業開始よりすでに7年目を迎え，音楽アウトリーチは，宇都宮大学の学生たちの修学の中に確固と位置づいている。地域の方々からも高評価をいただいており，一度訪問した先からは高確率で再度のオファーを受けている。また，「一見」の相手からもいくつものオファーが来る状態である。

本授業は，学校教育・生涯教育・専門実技など多方面から教育と音楽について学び，研究している学生に対し，ひとつのコア・プログラムとなるような，有意義かつ画期的な実践の場を提供することに成功している。また，同時に，この活動自体が大学の地域貢献に資するプロジェクトになっている。

4で述べたとおり，現状いくつかの課題を抱えている。これは，活動内部の問題というより，制度上の事柄に起因するものといえよう。

しかしながら，3で紹介したように，この授業の受講生たちは試行錯誤と切磋琢磨による向上を続けており，本授業における教育的効果は極めて大きい。

大学における修学システムと本授業の特異性との整合への模索をしつつ，状況改善に向けた工夫をしながら，地元・栃木県により強く根付いた宇都宮大学の活動として，末永く継続していきたい。